

「死にとどまるな！命にとどまれ！」

(ヨハネによる福音書11:1-44)

「主よ、4日もたっていますから、もうにおいます」

このマルタのセリフ、なんと生々しいことでしょうか。今は技術の進歩もあって、あまり死者の匂いというものを嗅ぐことはありませんが、わたしの記憶でも、小学生の頃の教会でのご葬儀や同級生が亡くなった時の、忘れられない匂いの記憶というものがあります。皆さんもあるのではないのでしょうか。

わたしたちの信仰の根本には、主イエスの「受肉」というものがあります。神がわたしたちと同じ肉体をもって、この世に来られた。これが受肉です。創世記のはじめ、人は神と共に生きていました。しかし、人は神から離れてしまいます。旧約を通して語られるのは、その離れた人間を何度でも救おうとされる神であり、その度に神を裏切り続ける人間の姿です。そうしているうちに、人はどんどん神から離れ、ついには神がどこにおられるのか分からなくなってしまいます。その人間に向かって、神がいよいよ送ってくださったのが、主イエスです。まったく同じ存在ならば、人は分かるだろう。神は遠くにいるのではなく、あなたがたの只中にあるのだ、ということ、神は主イエスを通して示してくださいました。その出来事が「受肉」です。肉を受ける。それは、とてつもなく生々しい出来事です。わたしは今日の箇所を読むと、先程の死者の匂いの記憶がよみがえります。そしてそれとともに、主イエスという人間が、その匂いが漂う、まさにこのわたしたちが生きている世界に来られたのだということ、そして神はまさに、今この時もわたしたちの只中におられるということ、をあらためて知らされます。主イエスという生々しい命を示すことで、神はこのことをわたしたちに示してくださいました。

この現実には神がおられる。しかし、それを信じることのなんと難しいことでしょうか。そのこともまた、今日の箇所が示しています。マルタも、マリアも、主イエスのことを一度は心底信じた姉妹でした。また、主イエスも、マルタ、マリア、そしてラザロの兄弟のことを愛しておられました。そういう、深い繋がりがあつたはずの関係です。しかし、いざラザロの死という現実には直面した時、「信じる」ということは崩れてしまいました。もしかするとはじめから、マルタやマリアは、この世に来られた「神として」、主イエスを信じていたのではなかったのかもしれませんが。どちらかというそれは「尊敬」というものに近かったのかもしれませんが。今までの指導者と違うことを言う、本当にすばらしいことを語られる、そういういわば憧れの人間として、尊敬すべき人間として主イエスを捉えていたのです。彼女たちは今日の福音でも、主イエスを最大限敬っています。しかし、主イエスが人に命を与えることができるということまでは信じていなかった。いや、もしかしたら信じていたのかもしれませんが。しかし、愛する兄弟の死という圧倒的な現実には直面し、主イエスのことも、神の力をも諦めてしまう、というのでしょうか、見えない神の力よりも、現実の悲嘆が勝ってしまった。「神さまでも無理だ」と諦めてしまった。事実、その気持ちは「終わりの日の復活の時に復活することは存じています。」というマルタのセリフによく表れています。確かに信じています、けれども、この現実には変えられないでしょう、とマルタは言っているのです。主イエスの言葉をどこか現実の外に置き、今、兄の死という圧倒的な現実の前に、主イエスの業を信じるのが出来ない。人間の信仰の限界をありありと見せられるような、何ともリアルな場面です。

マリアも人々も同じです。圧倒的な死の前では、主イエスですら無力であると思っています。「盲人の目を開けたこの人も、ラザロが死なないようにはできなかったのか」と彼らは言うのです。先週の箇所にあった盲人の目を開く主イエスの業を見ていても、聞いていても、死という圧倒的な出来事の中で、「死者をよみがえらせる」などということは信じることができないのです。主イエスはこの人々の姿を目の当たりにした時、心に憤りを覚えられました。今日の箇所では二回、主イエスが心に憤りを覚えられたとあります。これもまた、非常に生々しい表現です。神は遠くにいて、ただ眺めているのではない。この只中にいて、わたしたちの心の動きまでもつぶさにご覧になって、感情を強く動かされる存在なのです。

主イエスは何に憤りを覚えられたのでしょうか。人々の不信仰に対してでしょうか。もちろん、それもあるでしょう。死の闇の中で、信仰を失ってしまう人間の姿に怒ったのです。なぜ、信じることができないのだ?!と。しかし、それよりも主イエスの憤りは、人間から神を信じる心を奪うものに対してです。つまり、主イエスは「死」に対して憤られたのです。人々から信仰を奪ってしまったのは、ラザロの死という現実です。この人間の死に対する無力感と、神への不信仰にこそ、主イエスは憤り、挑戦し、ラザロを復活させるのです。

これはヨハネによる福音書における最後の奇跡です。これ以降、主イエスは命を狙われるようになります。ラザロの復活を知った多くの人が、主イエスを信じるようになったために、ファリサイ派の人々や力を持っていた人々は主イエスを生かしておくことができなくなったからです。ここから、主イエスの歩みは、十字架上の死へと急激に加速します。恐らく、主イエスはこのことがわかっていたのだと思います。いよいよ、これにより自分は死へと向かうことになる。主イエスの憤りは、人間の不信仰への憤りであり、死への憤りでした。しかし、そればかりではない。自分自身がいよいよ向かおうとしている十字架上でのご受難への苦しい苦しい思いもそこにはあったに違いありません。そこに思い至る時、わたしたちは主イエスのご受難を見つめなければならぬのです。なぜなら、主イエスのご自分の死によって、死に打ち勝たれたからです。「主イエスの死への憤り」は、主イエスのご受難によって成し遂げられる、死への勝利へと向かうのです。そして神は、死んでしまった主イエスを復活させられるのです。神のもとでは、死んでしまった人の世界、いわゆるあの世も、この世もない。神にとっては、死者も生者も同じ神の支配する世界に生きる命にほかならないのです。このことを神は主イエスの死と復活によって示してくださいました。ここに、死は滅ぼされたのです。死は終わりではない。神のもとで、わたしたちは生き続ける。このことをこそ、主イエスのご自分の死によってわたしたちに示してくださいましたのです。それゆえに、キリスト教のご葬儀は明るいと、よく言われます。わたしたちクリスチャンにとって、死は終わりではなく、神のもとにある新たな命への旅立ちだからです。しかし、人が死に留まっている限り、これは分からない。マルタやマリア、ラザロの死に立ち会った人々がそうであったように、死に留まるならば、わたしたちは、神のもとにある、生も死も超えた世界に生きることはできません。主イエスはその人間に向かって、「わたしが身をもって示すから、だから、「死に留まるな!」」と叫び、わたしたちに強く呼びかけてくださっているのです。「命に留まれ!」「わたしに留まれ!」と呼びかけられているのです。主イエスがマルタに仰った「わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は、死んでも生きる。生きていてわたしを信じる者はだれも、決して死ぬことはない。このことを信じるか。」という言葉、そして「ラザロ、出てきなさい!」という言葉はこの呼びかけにほかなりません。

主イエスは墓の中に横たわっているラザロに向かって、「ラザロ、出て来なさい」と大声で叫ばれました。すると、ここが聖書の面白いところというか大切なところですが、「ラザロが出てきた」ではなく、「死んでいた人が、出てきた」と書かれているのです。「死んでいた人」という不特定多数の中の一人という形でラザロは描かれている、ということです。ラザロという名前は「神に助けられた者」という意味です。主イエスの呼びかけは「神に助けられたもの、出てきなさい！」という不特定多数に向けられたもの、ということです。その呼びかけに応えるものが、命を得る者だということです。

主イエスはわたしたち一人ひとりに呼びかけられています。ご受難によって示された神の救いは、他ならないわたしたち一人ひとりに向けられているのです。大斎節を経て、間もなく迎える復活日の前に、わたしたちは主イエスのご受難に留まらなければなりません。今日の福音における主イエスの憤り。主イエスは、信じることから人を離れさせようとするものと決然と闘います。その闘いは、主イエスのご受難とご復活によって、主イエスの勝利で終わります。これによってわたしたちが死という圧倒的な現実にも直面しても、信じ続けることができる道が開かれました。主イエスは単なる尊敬の対象でもなく、わたしたちの都合の良い奇跡を行ってくれる存在でもありません。この世にわたしたちと同じ肉体を持って生き、死に、そして復活されたことで、わたしたちに真の命を与えてくださる方です。死や絶望に留まってしまふ人間を必ず救い出してくださる主イエスの「出てきなさい！」という呼びかけ、「死に留まるな！」「命に留まれ！」「わたしに留まれ！」と呼びかけられる主イエスを信じ、主イエスに留まり、歩んでまいりたいと願います。